

プロヴァンス紀行・ゴッホとアルルとフランス人

ユキーナ・富塚・サントス

プロヴァンス紀行

ゴッホとアルルと

フランス人

2007

ユキーナ・富塚・サントス



1	プロローグ	4
2	アヴィニヨン	5
2.1	ラベンダーツアー	5
2.2	フランスとイタリア、どう違うの?	7
2.3	金婚式カップル ジャンレノ風ガイドの話	9
3	アルルの女は何がいい?	10
3.1	ゴッホとアルル	10
3.2	プロヴァンスとハーブ	12
3.3	プロヴァンスレシピ	13
3.4	プロヴァンス・ロゼ	13
3.5	アヴィニオンで一番うまいもの	14
3.6	運河どおりショッピング	15
3.7	アンチみどころのススメ	16
3.8	負け犬とフランス人	18
3.9	手に取るようにわかるフランス人とは?	20
4	アルルの跳ね橋	23
4.1	バスは間引かれた!	23
4.2	ああ、念願の跳ね橋	29
5	街角のカフェ	34
5.1	霧吹く街角	34
5.2	ペタンクという遊び	37
6	アルルのローマ遺跡	38
6.1	みんな元気!	39
6.2	愛を買う人・ラテンの気質	42
7	カマルグ干潟	43

7.1	バルセロナへの道.....	43
7.2	モンペリエの「天城越え」	45
7.3	遠くで電車をまちながら・・	46
7.4	バルセロナが見える.....	47

1 プロローグ

例年のように例年のごとく・・・なのだが、梅雨は苦手である。

概ねにおいて、日本は住みやすく四季があって、植生もバラエティに富んでおり、自然だけを見る限り、理想の国だと思っている。けれども地中海性気候の国ではベストシーズンと言われている六月、七月を日本で過ごすのは地獄・・・といっても過言ではない。



毎日の曇天、うっとうしい雨、息苦しくなるほどの湿度、何もかもが「不快」で溢れている日本・・・これを二ヶ月近くも、つまり一年の1/6に当たる期間、我慢できるというのは日本人特有の「忍ニン」の国民性ではなかろうか？

「思い切ったコトするねー」と勝ち犬軍団からの嘲笑を浴びながら、日本脱出をはかったのは2004年であった。この年の梅雨は日タシチリアの海で泳ぎながら、人生で最も貴重なヴァカンスをすごした。毎日じりじりと肌をやき、いいヤキを入れながら日本に戻ったときには、タイミング良く梅雨明けであった。

2005年もうっとうしい日本は早々にオサラバし、ローマとトスカーナの田園で真っ青な空、レモン、そしてひまわり畑をみて過ごした。日本が最もあつい時期である八月も、イギリスの郊外、嵐が丘の舞台ハウスでヒースの畑の中に文字通り埋まっていた。

ヴァカボンダ大放浪計画を追えて戻った2006年、梅雨真っ只中の6月の終わり、日本を一時はなれ、これまたトスカーナの田舎で、ブラジルからはるばる日本に婿に来たオットと落ち合ったのである。去年はどちらかというとカラ梅雨で、早く夏になったのも私にとってはラッキーだった。

さて、結婚式も終え、引越しも終えて、一息ついた今年の梅雨、数年ぶりに味わったスーパー不快に、これはたまらん！と日本を脱出したのは7月12日であった。

ひまわり、ヒースときて、今年わが身を沈めた畑はラベンダーである。

なぜラベンダーかと言われると、成り行きで・・・としか言いようがない。南仏に思いのほか憧れがあったわけでもない。「南仏プロヴァンスの12ヶ月」をバイブルのように読んでいたわけでもない。

東京からパリの片道チケットがあり、その使用期限が近づいていたので、パリから最も近く、日本の「不快」から一刻も早く開放される場所・・・、草原か何かでおもいっきりのびのびしたい！として思いついたのがプロヴァンスだったのである。

ご存知のとおり、フランスは思いのほか英語が通じないので、私のようにエセおフランスを話す人間は甚だ苦勞する定めとなっている。

けれどもパリからTGVもとおおり、3時間くらいで南仏に行けるようになったと聞いた。日本とパリ間のエールフランスは夜便がある。成田を夜の10時頃に出発し、翌日の早朝にはパリに着くのである。上手くいけば午前中には移動して、燦燦とした太陽の下、カラッとした空気を思う存分味わうことができる・・・

私の思いはそのイメージでいっぱいになり、ラベンダー畑で味わう開放感に馳せる思いは止まらなくなった。

様々な困難と、いろんな思いを乗り越えて、目にしたラベンダーは写真のごとくである。

話によれば、ラヴェンダーよりもより栽培しやすく改良された品種はラヴァンダインというらしく、ラヴェンダーよりも紫が濃く、一本の枝から花房をつける枝が三本に先別れしているのが特徴である。

2 アヴィウニヨン

2.1 ラベンダーツアー

ラヴェンダー、ラヴァンダイン、どちらもともに、畑に下りた途端、むせ返るような芳香であった。

この蜜を求めて蜂がわんさか飛んでいるのもラヴェンダー畑の特徴である。

私が訪れた街は、アヴィニヨン近郊の **Sault** (ソー) という小さい村落である。周辺の農家はラベンダーを栽培し、香料にしたり、この畑に集まる蜂から蜜をとり、名産品のヌガーを作ったり、ひまわりオイルを作ったりしているらしい。

アヴィニヨン、エクサンプロヴァンスから観光客を相手にしたツアーがいくつか企画されている。私が参加したものは、こうしたラヴェンダー畑を巡り、ソーの街でいっぴくして、その後さらにワイナリーを回ってテイスティングをする、というのもの。キャラバンカーでまわり、一人分の参加費用は30ユーロ、一時期だったら、4000円以下のお手ごろツアーが、このユーロ高のおかげで5000円以上のバカったかい値段になってしまう。

いろいろとツアー会社のだしている値段をくらべて一番安いのが、この30ユーロであった。ツーリストインフォメーションのお姉ちゃんは、マイクロバスではなく、大型観光バス25人乗りくらいのグループになるので、この値段で提供できるのだという。

この時期はラベンダーを見たい観光客が押し寄せ、どのツアーも早くいっぱいになってしまうという言葉にせかされて、大人数のツアーグループでもいいかなと思いこの30ユーロツアーにした。

ところが実際に、アビニヨンの橋のたもとの、ツアーバス集合場所に乗りつけたのは、7人のみのミニバンであった。

流暢に英語を話すガイドによれば、この日のツアー参加人数は6人だという。結果的にはお得な値段でこじんまりとしたラベンダーツアーができたことになり、これまた、私の旅には良くあることだが、旅先でいただいた思いがけないラッキーとなった。